様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2015
課題番号：２６７７００９６

研究課題名（和文）三嶋本『日本書紀』を中心とした『日本書紀』写本の研究

研究課題名（英文）Research on Transcriptions of the Nihon-Shoki, Focusing on the Mishima Version of the Nihon-Shoki

研究代表者
植田　麦（UEDA, Baku）

明治大学・政治経済学部・講師

研究者番号：３０５１１５３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：　三嶋大社所蔵『日本書紀』とそれに付された３巻の書物についての研究を行った。三嶋大社所蔵『日本書紀』が、平安期に成った歴史書である『類聚国史』の異本であることは、すでに指摘されてきた。本研究により、三嶋大社所蔵『日本書紀』が現存する『類聚国史』とは本文を異にすることが明らかになった。さらに、現存する『類聚国史』にさかのぼる古態を示すものであることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：I conducted research on the Nihon-Shoki housed at the Mishima Taisha and the three books appended to it. Scholars have already observed that the Nihon-Shoki housed at the Mishima Taisha is a variant of the Ruiju-Kokushi, a history book written during the Heian period. This research reveals that the text of the Nihon-Shoki housed at the Mishima Taisha differs from that of the existing Ruiju-Kokushi. Moreover, it also reveals that this Nihon-Shoki illustrates an ancient form that goes back to the existing Ruiju-Kokushi.

研究分野：人文学

キーワード：古事記　日本書紀　中世日本紀

１．研究開始当初の背景

近世初期に慶長勅版の『日本書紀』が刊行されて以来、『日本書紀』研究の基本テキストとしては卜部家に伝来したものが用いられてきた。現在の『日本書紀』注釈書類もまた、卜部本を基本として校訂を行っている。一方、近世以前に書写された、卜部本とは異なった系統の『日本書紀』写本（以下、非卜部本）は、参考程度の扱いしかうけてこなかった。原典としての『日本書紀』の姿を求めるとき、それらにはあまりにも改変された記述が多いためである。

しかし、ここで改めて考えるべきことは、720 年から現在までの『日本書紀』が、必ずしも一系列ではない、という事実である。改変本として除外された写本もまた、連続する『日本書紀』の運動性のなかで位置づけて考える必要がある。

一方、『日本書紀』の成書以降、原典としての『日本書紀』からは大きく隔たった神話言説が、「日本（書）紀」の名の下に形成されていく。『日本書紀』を実証的に研究する立場からは一顧だにされなかったこれらの言説は、1970 年代に伊藤正義が〈中世日本紀〉の概念を提起することで見直されることとなった。すなわち、歌学・神道説・仏教説等と『日本書紀』注釈が混ざり合い、新たに豊穣な思想世界を形成していく、その在りようを見定める視座として、〈中世日本紀〉が示されたのである。

伊藤以後、阿部泰郎・徳田和夫・牧野和夫をはじめとする、多くの中世文学の研究者たちによって研究は深化し、さらに近年では原克昭によってその研究が整理された。〈中世日本紀〉研究は、文学研究と思想研究・歴史研究の紐帯ともなるもので、研究の枠を革新する大きなうねりを起こしたのである。

『日本書紀』を研究対象とする立場からは、この〈中世日本紀〉研究を承けたうえで、『日本書紀』写本がいかにあったのかを考えることが必要である。つまり、『日本書紀』から〈中世日本紀〉への一方通行ではなく、それがいかにして『日本書紀』へと環流していくのかを考察しなければならない。

如上の状況に鑑み、申請者は戦略的に三嶋本を対象とした研究を行うこととした。当該書は三嶋大社・國學院大學に分蔵される『日本書紀』写本で、その奥書から中世（応永 35・西暦 1428 年）に書写されたことが明らかである。三嶋本および同系統の諸本は、後述するとおり『類聚国史』（平安期に成立、『日本書紀』を多く利用する）の改変本である。また、卜部本に比して多くの異同をもつことが知られる。この異同は〈中世日本紀〉にみられる言説が本文に入り込んだものであり、そのため原型としての『日本書紀』を求める立場からは否定的な評価を受けることが多い。しかしながら、それが故に三嶋本は〈中世日本紀〉から『日本書紀』への環流の実例と認めることが可能である。しかも、〈中世日本紀〉の成立と共時的に書写された『日本書紀』としても、重要である。

三嶋本は、『日本書紀』全三十巻のうち、巻第一から第三までで構成される。『日本書紀』の一部に過ぎないようにみえるが、〈中世日本紀〉においては『日本書紀』神代巻（巻第一・第二）の書写・享受・解釈が主となることを思えば、敢えて神代巻を主とした三嶋本は、すぐれて〈中世日本紀〉的であるといえる。

２．研究の目的

前述のとおり、三嶋本日本書紀は写真複製が公刊されたものの、その文献学的な研究があまり進んだ状態になかった。また、当該書には日本書紀の他に３点の具書があることが知られていたものの、それがどのようなものであるのかは詳らかにされていなかった。そのため、報告者は日本書紀と具書との関わりを明らかにし、中世における日本書紀書写の状況、あるいは日本書紀の享受がいかなるものであったのかを考えることとした。

夙に中村啓信によって、三嶋本が『類聚国史』の改変本であることが、書物としての形質の観点から指摘されている。『類聚国史』は平安期に編纂された類書で、その巻第一・第二はそれぞれ『日本書紀』の巻第一・第二を収載している。つまり『類聚国史』は、「神代（神祇）」に関わる内容はそのまま享受するという態度を示している。そして、『類聚国史』は平安期を通じて、官人たちの儀礼に関する依拠テキストのひとつとして利用される。ただし、『類聚国史』に『日本書紀』巻第三以降をそのまま用いた巻は存しない。

報告者は本研究に先立ち、予備調査として、三嶋本巻第一・第二を『類聚国史』（仙石政和校本）・『日本書紀』（乾元本、卜部本系）と、巻第三を『日本書紀』（兼右本、卜部本系）と校合した。結果、三嶋本が現存『類聚国史』の本文とは大きく異なること、巻ごとに異同に傾向があること、また『類聚国史』とも卜部本とも異なる独自記載を多くもつことを確認した。つまり、三嶋本が必ずしも（現存の）『類聚国史』の一本と位置づけられず、また卜部本とも大きく異なったものであることを指摘しうる。

如上の状況から、本研究ではこれまであまり注目されることのなかった、非卜部本を『日本書紀』研究のなかに位置づけることを目指した。よって、本申請にかかる研究によ

り、これまでの『日本書紀』研究を相対化することが可能である。また、本研究では〈中世日本紀〉に代表される、中世文学研究や思想史・宗教史研究などの知見を積極的に導入することにした。現在の日本文学研究は、時代・手法によって細分化され、ブロック化しつつあるが、学際的な研究の契機となりうると考えられたためである。さらに、三嶋本の祖本に相当する『類聚国史』は、史書と類書の編集の在り方を考えるとき、極めて重要な書物である。にもかかわらず、現時点で影印本の刊行すらほぼ皆無であり、その研究には大きな開拓の余地があると見込まれたためである。

３．研究の方法

本課題で予定された研究の概要は、

(A) 三嶋本日本書紀の現物と具書との文献調査

(B) 三嶋本と関わりの深い『類聚国史』の調査、就中、神宮文庫所蔵本の文献調査

(C) 三嶋本日本書紀および具書と『類聚国史』との比較研究

であった。その成果については後述することとして、本項目ではその具体的な方法について述べる。

(1)初年度の研究として、
①三嶋大社での文献調査
②文献調査データの整理および検討
③先行研究の調査と確認
を行った。

①ではまず、静岡県三嶋大社にて、渡邉卓氏（國學院大學助教）とともに宝物館の学芸員との打ち合わせを行い、調査対象文献の状態を確認した。上述のとおり、対象となるのは『日本書紀』三巻のみではなく、具書として付された三点の典籍である。事前に、中村啓信の報告により、それらの書物がそれぞれ『日本国大社二十一社為本紀守護』『中臣祓解除』『神口決』であることはわかっていたものの、その内容がいかなるものであるのかは不明であった。打ち合わせにより、『日本書紀』三巻と具書三巻がいずれも装丁・料紙を同じくし、また同様の補修を受けたものであることから、同時期に三嶋大社に奉納され、その後補修を受けたものであることが明らかとなった。これにより、全点の調査を行うことを確定した。

その後、古典籍の撮影に長けた渡邉氏に助力を乞い、二日間の日程で資料の全点を撮影し、また書誌調査を行った。書誌データは、経箱の採寸・状態の確認、六点の資料について全長の採寸および書写状況の推定を行った。

②では、①で行った調査の書誌データを電子化するとともに、『日本書紀』以外の典籍について、翻字作業を行った。また、その作業に伴い、それぞれの典籍がいかなる書物と近縁性を有しているのかを調査した。

③では、本研究に関わる先行研究を博捜し、それらの研究成果を確認した。一連の作業では、学生アルバイトを雇用することで、作業の効率化をこころがけた。

また、これらの研究を通じて、副次的に得られた知見をもとに、学術論文を発表した

(2)二年目の研究として、
①神宮文庫での文献調査
②データの整理
③学会での発表および論文の発表
を行った。

①では、三重県神宮文庫に所蔵されている『類聚国史』の調査を行った。特に重要な典籍については、写真撮影が許されなかったため、肉眼での調査となった。

②では、前年度から蓄積していたデータに加えて、当該年度の調査や検討によって得られたデータを加え、総合的なデータベースの作成を行った。

③では、上代文学会での研究発表を行うとともに、そこで発表した内容の一部を論文として執筆し、発表した。そこでは特に、三嶋本『日本書紀』が現存『類聚国史』写本といかなる関係にあるのかを中心として論じた。

４．研究成果

これまで公になっていなかった三嶋本の具書三巻についての詳細なデータを得るこたができた。三嶋大社の特別の配慮により、すべての転籍についての写真データを得られたため、今後もさらに、研究の深化が予想される。

得られたデータをもとに、三嶋本日本書紀が、単なる「正統な」日本書紀からの逸脱でないことを明らかにすることができた。また、類聚国史との比較検討を通じ、平安期における日本書紀書写の在りようの一端を明らかにすることができた。

さらに、古事記と日本書紀との比較検討を行った結果、副次的な研究結果として、古事記上巻から中・下巻への接続についての論考を進めることができた。

５．主な発表論文等

植田麦「三嶋本『日本書紀』と『類聚国史』」、『文学史研究』、査読有、56 号、2016 年、pp.46-55

〔雑誌論文〕（計２件）

植田麦　「『古事記』上巻から中巻への接続―神話から歴史へ―」、『万葉語文研究』、査読有、11 集、2015 年、pp.1-21

〔学会発表〕（計１件）

植田麦「三嶋本日本書紀の輪郭」、上代文学会大会、高岡市生涯学習センター（富山県）、2015 年 5 月 17 日

６．研究組織
(1)研究代表者
植田麦(UEDA Baku)
明治大学・政治経済学部・講師
研究者番号：30511539